

## 浅野 仁教授退職記念号によせて

社会学部長 高 坂 健 次

浅野 仁先生は静岡商業高等学校、同志社大学商学部、同大学大学院をご卒業になり、養護老人ホーム健光園生活指導員、東京都老人総合研究所社会学部研究員を経て、1984年助教授として関西学院大学社会学部に赴任されました。1986年には教授に、1988年には大学院博士課程前期課程指導教授、1993年には大学院博士課程後期課程指導教授になられました。一貫して、老人社会福祉をご専門とされてこられました。在外研究のご経験も豊富で、フルブライト上級研究員としてはウェイン州立大学で、またデューク大学、南デンマーク大学、中国・清華大学、等々で研究生活を送ってこられました。著書は学位論文ともなった『高齢者福祉の実証的研究』(1992年)をはじめ、22冊におよぶ共編著、100点以上の論文を執筆されています。

若手の人材養成にも力を注がれ、社会学研究科において主査ないし副査として多くの大学院生ならびにそのOB/OGに対して博士学位の授与に尽力されてきました。そして放送大学客員教授として『高齢期を支える社会福祉システム』(テレビ:2007~2010年度)を担当され、映像を通してその警咳に接する受講生は全国に広がっています。学会活動はむろんのこと(日本老年社会科学会理事、日本社会福祉学会会員、日本認知症ケア学会評議員)、特記すべきは学外委員活動を通しての社会貢献です。退職のときまで継続的にお引き受けになっている委員職だけでも26職に及びます。ほんの若干のみあげれば、西宮市社会保障審議会会长、兵庫県政学会評議員、福祉あんしん機構・神戸理事長、介護福祉士国家試験副委員長、兵庫県社会福祉審議会委員、芦屋すこやか長寿プラン評価委員会委員長、などなど。

浅野先生は「老人福祉」一筋と見えますが、先生の若き日にまで遡れば必ずしもそうではないことが知られます。そのあたりのことについて、次のようにお話をされています。「自分は、大学で商学部を卒業した。在学中にクエーカー教会の学生国際団体に接した。その団体は児童養護施設やハンセン氏病島に出かけていくボランティア活動をしていた。そこで経験から、そうした人たちが幸せにならないと自分は幸せにならないと思った」と(2007年10月31日のチャペルでの話により)。そして自分は「世の中の捨て石になろう」と思われたそうです。最初、卒業後に施設に勤めるようになったのもそうしたことがきっかけであったとのことです。

「捨て石」という比喩に暗示されるように、浅野先生の少なくとも一つの趣味は囲碁であります。個人研究室にも碁盤を置いておられましたし、一時期教職員組合の囲碁クラブのメンバーでもあられました。浅野先生と私とは、お互いに趣味の一部を同じくし、個人研究室がお隣同士であったにもかかわらず、互いの実力について手探りであったために、ほとんどは囲碁の話をするばっかりでした。「私は、(梅沢由香里さんの司会している) NHK杯テレビ囲碁トーナメントの試合はすべて録画してもってますよ、よかったですでもお貸します」と言われて私はさらにびびってしまったのであります。「でも一度も、ビデオを見直したりする時間はありませんがね」とおっしゃったのを聞き逃さなかった私は或るとき不遜にも「対局」を申し出ました。これまでで一回かぎりの手合わせでしかありません。浅野先生はあくまでも定石どおり(のように私には思いました)で形もよく、でもどこか「石の攻め方」に冷厳、非情のところがあり、勝負に拘泥しておられるのかおられないのか分からぬ体でした。私はと言えば、無手勝の流れにあこがれつつも定石・常識というものが身についていない喧嘩碁で、およそ品格というものがなく、不快な思いをおかけしたのではと反省しています。

型を大切にされているダンディズムは、研究室の調度・整理整頓にも遺憾なく発揮されていて、雑誌はすべて製本して整然と並べられ、卓上にはパソコンのほか、仕事中の原稿用紙にモンブランで向かい、

脇にはコーヒーメーカー、壁には大きなビュッフェの絵がかかっていました。毎日があたかも喫茶『ビュッフェ』でのお仕事振りのようで、先生はそこで端整で整然とした学風・師風・棋風を作りあげてこられたようにお見受けします。

先のチャペルトークでは、学生に対して「どうか人生（マジョリティの人の選ぶ道ではなく）混み合わない道を選びなさい」と諭されていました。定年はひとつの区切り。個人的にはどのような「布石」を描いておられるか、立ち入ってまではお伺いしていませんが、「傍目八目」ということもあるうかと思います。どうか「社会学部」の行く末、「人間福祉学部」の船出に対してもご助言ご指導をよろしくお願ひいたします。